

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 3 日現在

機関番号：55501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02439

研究課題名(和文) 書入をふまえた『浜松中納言物語』新校本の作成

研究課題名(英文) Study on Hamamatsu Chunagon Monogatari with a focus on commennts written by classical Japanese scholars

研究代表者

赤迫 照子 (AKASAKO, SHOKO)

宇部工業高等専門学校・一般科・准教授

研究者番号：70452612

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が目指したのは、平安時代後期成立の『浜松中納言物語』写本の悉皆調査と、本文・伝本・享受史研究の成果を反映させた新校本の作成である。新校本には「本文篇」だけでなく、「諸本解説」「論考篇」も付す。焼失・所在不明・新写も含めて、知り得た写本の数は66点である。実見調査と収集した複写物・画像データによって翻刻を進め、本文系統の分類を判別した。さらに各写本にある書入の、特に注釈の受容の分析によって、書写関係や享受の様相を解明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『浜松中納言物語』は三島由紀夫『豊饒の海』の典拠であり、また、学校教育の現場でも国語科便覧にて紹介されているので、国内外でそれなりに知られた作品である。その一方で、研究はさして活発ではなく、中でも諸本全体を俯瞰する研究は滞っていた。小松茂美氏『校本 浜松中納言物語』(二玄社 昭和39年)から半世紀以上が経過した今、新出本や所蔵機関変更等、現状に即した情報の更新・再整理をした研究が必要である。本研究はまさにその役割を担っており、研究の活性化や作品の再評価に貢献できる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to carry out a thorough investigation of the manuscript of the "Hamamatsu Nakanagon Monogatari". According to my research, the number of manuscripts of "Hamamatsu Nakanagon Monogatari" was 66. These manuscripts were reprinted and their textual lineages were classified. The text lineage of those manuscripts was classified. I then compared the comments written by classical Japanese scholars on those manuscripts to figure out the relationship between them.

A new variorum manuscript summarizing the above bibliographic information has been prepared.

研究分野：日本文学

キーワード：浜松中納言物語 写本 書入 伝本系統 校本 物語享受 和学者 本文

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

『浜松中納言物語』伝本は一系統で、本文系統の分類方法は松尾聰氏「浜松中納言物語伝本考 本文批評の方法の実例を示すための」『学習院大学研究年報』第1号 1954.12)・池田利夫氏「浜松中納言物語伝本系統試論」『鶴見女子大学紀要』第10号 1967.12)によって既に完成されている。『浜松中納言物語』研究はこの分類方法に拠って展開してきたのであった。

しかし、各写本を分類するまでにとどまっておき、諸本間の関係を把握する、総合的な視点が欠落していた。それに気づいたのは、2008～2010年度基盤研究(C)「『とりかへばや』伝本の流布状況を視点とした江戸時代における物語享受の研究」(研究代表者：西本寮子 研究分担者：赤迫照子)においてである。江戸時代の流布状況を調べる作業を通して、小松茂美氏『校本 浜松中納言物語』(二玄社 1964)の限界が明らかになった。

そこで、新校本作成の基礎固めのために、和学者の書入(校合・付注・考証の総称としてこの語を用いる)から得られる情報に着目し、2013～2015年度若手研究(B)「書入を手がかりとした『浜松中納言物語』本文生成過程の研究」(研究代表者：赤迫照子)にて、新出本の紹介、諸本に存する書入の整理と書写関係、D類/乙類第三種本・F類/乙類第一種本のさらなる体系化、蔵書印による旧蔵者や書写時期の特定、江戸中期～末期の享受の様相の解明等の成果をあげた。また、現存写本の複写物・画像データの大半を収集できた。

これによって新校本作成の道筋が整ったと判断し、本研究の科研申請に踏み切った。

2. 研究の目的

諸本間の関係をふまえた、新校本の原稿作成である。悉皆調査をし、書入も明示した、総合的な視点による校合を行う。その成果を新校本として出版する。伝本・享受史研究の成果も記載する。つまり本研究は、『浜松中納言物語』基礎研究の集大成を目指すものである。

3. 研究の方法

(1) 写本の悉皆調査による書誌情報の収集

実見調査を基本とし、全写本の書誌情報を把握する。所蔵機関関係者に対して、所蔵の経緯についての聞き取り取材も行う。これらの成果は新校本の「諸本解説」「論考篇」に反映させる。

(2) 複写物・画像データの収集と翻刻

書入の朱墨の別を確認するため、可能な限りデジタルデータを収集する。

(3) 書写状況・受容の様相の解明

本文系統は異なるが、書入や奥書によって何らかの関係が認められる写本群が存在する。どの写本と写本にどのような関わりがあるのか、なぜそのような関わりが生じたのか等、相互関係を解明する。特に和学者の書入に注目し、書入が継承された流れを整理する。成果は新校本「論考篇」に反映させる。

書入が転写及び本文文化されていく過程の分析

それほど多くの事例はないが、本文の同じ箇所に対する書入を比較し詳しく検討していくと、転写の過程で書入が「正しい本文」として扱われていく様相が確認できる。これによって各本の書写の前後関係を明らかにすることができる。

書入の注が継承された様相の整理

享受資料の分析

対象は国立国会図書館蔵『浜松中納言物語目録』・宮内庁書陵部蔵『浜松中納言物語類標』・静嘉堂文庫蔵『浜松中納言物語系譜』である。

(4) 校合作業

最近の『源氏物語』『狭衣物語』本文研究を参考にし、書入の内容をどのように記載するかを検討する。

校合の底本決定

底本の候補は、江戸時代前期写とされてきた小笠原家旧蔵三条実助相伝転写本(不二文庫旧蔵・現在の斯道文庫本四本の内の一本で、小松茂美氏『校本』の底本)と、最善本とされる国立国会図書館蔵榊原家旧蔵本である。『校本』と同じ底本のままにするべきなのか、検討する。

また、巻二のみは小学館『新編日本古典文学全集』に倣い、祖形本の鶴見女子大学図書館蔵九条家旧蔵本(巻二の零本)とするべきか、検討する。

4. 研究成果

研究期間の多くは、写本の書誌情報の整理・翻刻作業に費やした。その結果、焼失・所在不明・新写も含めて、66点の写本を知り得た。

(1) 写本の実見調査による書誌情報の収集

本研究期間で実見したのは以下である。調査先では可能な限り撮影をして、画像データを入力した。なお、悉皆調査は遂げていない。校務のスケジュールの調整がつかず、実験調査に赴くことができなかった所蔵機関もある。また、閲覧の許可が得られず、手に取って調査できなかった本もある。

岡山大学附属図書館小野文庫本・東海大学附属図書館桃園文庫本
東京大学文学部国語研究室本・国文学研究資料館所蔵の数点

京都大学総合博物館勸修寺家旧蔵本・京都大学文学研究科図書館蔵岡村保孝本
フランス パリ 大学間共同利用言語・文化図書館 (Bibliothèque universitaire des
langues et civilisations 通称 BULAC) 蔵本

本研究以前から続けてきた実見調査で、多くのことを知り得た。その一端を記す。

『校本』底本の小笠原家旧蔵本には、蔵書印「笠家文庫」が存する。『校本』「諸本解説」はこれによって「豊前の小倉藩主・小笠原家の伝来本」とする。しかし、国文学研究資料館「蔵書印データベース」で調べたところ、印は肥前国唐津藩主小笠原家のものであった。また、実見によれば、江戸時代前期の終わりか、中期の写だと思しい。

◎国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」に『浜松中納言物語』写本として、東海大学付属図書館桃園文庫『つらゆき物語』二点の情報が掲載されている。実見したところ、これらは唐が舞台で紀貫之が登場する『蟻通明神縁起』であった。なお、東京大学文学部国語学研究室所蔵『浜松中納言物語』写本の内題は「貫之のもの語」であるが、この内題が生じた背景は不明である。

現存諸本の内、最も書入が多く詳細なのは、京都大学文学研究科図書館蔵岡村保孝本である。それらの書入は『浜松中納言物語系譜』作成に向けての研究成果である。清水浜臣の注を踏襲する意識はそれほど強くはなく、むしろ、自説を積極的に示している様相が看取される。

予想してはいたが、本居宣長記念館本居春庭自筆宣長自筆奥書本が一門で書写され、流布した影響はやはり大きい。例えば(3)で述べるように研究書『浜松中納言物語目録』の依拠本は宣長奥書本の転写である。

(2) 複写物・画像データの収集と翻刻

『校本』に使用された写本から順次、翻刻を進めた。こちらも未完了である。継続して作業を進める。

書入の翻刻はほぼ完了している。書入を一覧し各本同士の比較が容易にできるよう、リスト化している。

(3) 書写状況・受容の様相の解明

受容に関しては、小山田与清による『浜松中納言物語目録』と水戸藩徳川斉昭旧蔵村上真澄校本の關係の検討を通して、大きな収穫を得た。「与清按此物語蓋缺首卷」の書入から、村上真澄校本の親本は現存が確認できない小山田与清所蔵本だと見てよい。その小山田与清所蔵本は『目録』の依拠本だったはずで、つまり、村上真澄校本は依拠本の転写ということになる。確かに、『目録』掲出語句に記した依拠本の丁数・裏表と村上真澄校本のそれは一致する。『目録』依拠本は、『目録』本文の様相から宣長奥書本の転写であり、D類/乙類第三種本である。村上真澄本もD類/乙類第三種本であり、何よりも宣長奥書本と同じく内題が「浜松中納言殿物語」なのである。ただし、村上真澄による他本からの補入で、A類/甲類本文との混態を見せているのである。近世初期の善本を祖にするA類/甲類本を村上真澄がなぜ、どのようにして入手したのかは、まだ解明できていない。水戸藩にはA類/甲類の彰考館蔵本(資料番号「巳/四」)もあったが、該本による校合なのかは不明である。

和歌山大学紀州藩文庫蔵の村上真澄写『栄花物語』写本にも、「文化十年高田与清以九卷抜萃校合」とあり、小山田与清との交流の痕跡が確認される。本居大平門人の村上真澄なる人物は、他にも『住吉物語』を校合しており、『浜松中納言物語』を含め物語書写や考証に関心を寄せた人物であった。村上真澄については引き続き調査を続けたい。

(4) 校合作業

(2)の翻刻と合わせて、本文を対校した一覧データの作成に取り組んだ。こちらも完了に至っていない。今後も引き続き作業に取り組み、新校本原稿完成に向けて歩いていく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 赤迫照子	4. 巻 65
2. 論文標題 『浜松中納言物語』書誌点描：清水浜臣本書入・「貫之もの語」など	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宇部工業高等専門学校研究報告	6. 最初と最後の頁 1 - 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 赤迫照子	4. 巻 64
2. 論文標題 国立国会図書館蔵『浜松中納言物語目録』の依拠本（二）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宇部工業高等専門学校研究報告	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----